

## AYA 世代のがん患者として

阿南 里恵

23歳の頃、みなさんは何に興味があり、何をしていたらっしゃったのでしょうか。私は東京で一人暮らしをしていました。関心のあることと言えば、お洒落と恋愛と仕事でした。休日には池袋や渋谷でショッピングやデート、平日は会社で褒められたくて一生懸命仕事に励みました。友達との会話と言えば「彼氏と喧嘩した」「どこのお店の洋服が流行っている」「どのタレントさんが可愛い」とか、「何歳で結婚して仕事はどうする」という話題ばかりでした。

皆さんはそうした価値観を持っている女性が突然がんになり 23歳で子宮を失ったとしたら、何と声をかけられるのでしょうか。若くしてがんになることは“特別なこと”だと思われるので、家族は個々にその原因を探りました。8年前は子宮頸がんという言葉さえ全く知られていない状況で、間違っただけの情報もたくさんありました。そして、母から「あんたは男性の経験が多いのか」と言われ、知識の無い私は何も言い返すことができませんでした。家族は何年間も私のがんになったことを親戚に隠して過ごしました。私自身も疑問は抱えつつも、恥ずかしい病気になったんだというような認識でした。だからウィッグを自分で買いに行くことができませんでした。また「若いのに可愛そう」「若いのに大変だったね」と言われることや思われることが何よりも嫌で、看護師さんや友達に辛い思いを話すこともできませんでした。

確かに私にとって経過観察の5年間を乗り越えることはとても大きな目標でした。ですが無事に生きてこられたからこそ、私の20代はとても辛くて暗く長いものでした。家族も私と同じように孤独に悩み苦しみ続けました。生きることが私たちにとって残酷なことだと何度も感じました。

23歳で私のがんになったとしても、周りのほとんどの同級生たちには“一般的”な時間が流れていくのです。私は専門学校を卒業しましたが、大学を卒業した多くの同級生たちは23歳や24歳で就職し、28歳頃に結婚ラッシュ、30歳頃に出産ラッシュでした。みんなの就職の話、結婚の話、出産や子育ての話を私はただただ聞いているしかありませんでした。その7年間もの間、私は多くの時間をがんの再発の恐怖と闘いながら就労に悩み、子どもが産めないという事で恋愛にも臆病になりました。「いつまでこんな日々が続くのだろう」という恐怖と不安でいつも頭の中はいっぱいでした。今こうして皆さんの前でお話をさせていただいている自分の姿を想像することなんて全くできませんでした。

皆さんにぜひお聞きしたいことがあります。実務経験や国家資格のない若いがん患者が就職する時、不利益を受けることはないのでしょうか。実務経験や国家資格がない上に後遺症を抱えたり治療や検査を継続する必要がある場合、そんな若い患者でも夢を実現できる社会でしょうか。

当時の私は採用試験で履歴書に後遺症のことも書けず、面接官に「健康ですよ？」と聞かれれば「はい」と嘘をつくしかありませんでした。しかし、結局少し忙しい時期がくると後遺症で身体がいう事を聞かず、会社の全員に事情を話さなくてはなりません。ところが全員に話しても結局、「みんなに迷惑をかけている」という思いから会社を辞めざるを得ませんでした。

恋愛に関しても、実際に私は交際していた男性に「やっぱり自分の子どもが欲しい」と言われ、どこにもその悲しみをぶつけることも、誰かを恨むこともできず、ただただ泣くしかありませんでした。それからは自分が子どもが産めない身体であることをどのタイミングで伝えれば良いのかわからなくて臆病になったり、相手の男性に同じ苦しみを背負わせることができなくて距離を置いたりしてきました。それでも、将来は子育てがしたくて市役所に里親制度について電話で問い合わせたこともありました。現在はわかりませんが当時は「健康であること」が条件の1つであると聞き、本当にとどめを刺されたような大きなショックを受けました。

友達とのつきあいにも影響がありました。お洒落に夢中な年齢でしたのでお腹に大きな傷ができたことによって、20代はプールや温泉にも行けませんでした。

長い年月の間に次から次へと諦めなくてはならない事にぶつかりました。その一方で以前、私が当たり前のように描いていたたくさんの夢を周りの同級生たちは実現していききました。どうして私は普通の人生が歩めないんだろう、一体私が何をしたというのだろうかと自分を責めました。

そうした時間が過ぎてゆくなかで、兄が結婚して子供ができました。両親に孫の顔を見せてくれたことに今でも心から感謝しています。そして、「私が産める間に代理出産してあげるよ」と言ってくれた義姉にどれほど励まされたことでしょうか。

私は今、31歳です。現在は職場の理解や支援、そしてたくさんの方々のご協力のお陰で本当に幸せな日々を過ごしています。日本に私のがんを治す技術があったこと、その治療を誰もが受けられる社会であったこと、治療費を支払える両親がいたこと、私を支えてくれた家族や友人がいたことに心から感謝しています。そして、私のいのちがある限り最後の1日まで皆さんの為にその恩を還したいと思っています。ですが、20代の私と同じような辛くて孤独な日々を過ごしている若い患者さんがいるならば、私は少しでも早くその方々を救いたいです。

就職、恋愛、結婚、出産、その時期をこれから乗り越えなくてはならない世代だからこそ、偏見や差別を受ける機会が多くあります。偏見や差別というのは本人がどれだけ頑張ったとしても、周りの人たちの意識が変わらなければずっと状況は変わりません。きっと日本のどこかに、命が助かったことを悔やむような状況の中で生きている患者さんがいるのではないのでしょうか。だからこそ、私は日本の端から端までどこの地域でもがんの正しい知識を学ぶ機会を積極的に作るべきだと考えています。また、このように国や都道府県のがん対策に携わる方々に若い患者の声を聞いていただきたいと切に願

っています。

そうした取り組みをしていくとともに、若い患者の苦しみを分かち合える同世代のピアサポーターを育成していくべきであると感じています。お洒落や恋愛や夢に夢中な年代であるということ、これから社会に出ていく年代であるということを尊重したケアと制度をぜひ実現していただきたいです。

以上、AYA 世代のがん患者として、体験談と体験者としての願いを述べさせていただきました。大変貴重なお時間をいただき、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。